

ちっちゃな「いっぴん(一品・逸品)」ミュージアム展示資料解説

みやこ町歴史民俗博物館

1. 資料概要

- ・ 対象資料及び展示タイトル : 小宮豊隆(こみや とよたか) 資料—リアル“三四郎”の世界を観る—
- ・ 法量/成立年等 : 全量は約5,000点(展示は10点) / 明治半ば~大正期(19~20世紀)
- ・ 所蔵者 : 当館(小宮里子氏[小宮豊隆氏令嬢]旧蔵でH25・29に当館寄贈)
- ・ ポイント : 夏目漱石の小説「三四郎」のモデルとなった人々ゆかりの資料を集めたもので創作の基盤となった現実世界の一端を知ることができる。すべて初公開資料(当館)で、漱石や近代文学研究史上ユニークなものとなる。

2. 資料解説(登場人物別)

●「三四郎」ゆかりのいっぴん

小宮豊隆 一高卒業証書 明治38(1905)年

三四郎は五高(熊本)卒の設定だが、モデルの小宮は一高(東京)を卒業して帝大生となった。ただ小宮は一高受検は五高で行い、就学のため汽車で上京した点は小説と共通する。

小宮豊隆肖像写真 明治38年(1905)年

帝大生となった三四郎は様々な人と出会う。モデルの小宮も多くの同窓を得たが、写真には漱石同門となる野上豊一郎(のちに法政大学総長・能楽研究者)が写る。

●「美禰子」ゆかりのいっぴん

森田草平発小宮宛はがき 明治42(1909)年

森田は平塚明子(のちの「らいてう」と起こした心中未遂事件を小説『煤煙』に仕上げたが、漱石は平塚を『三四郎』のヒロイン・里見美禰子のモデルとした。

小宮豊隆 朝日文芸欄担当時の書評手帳 明治42~44(1909~1911)年

小宮は、朝日文芸欄担当中さまざまな書評や文芸論・所感等を、手帳に詳細にメモしたが、『三四郎』『煤煙』の関係欄は女性観・恋愛観の記述に満ち三四郎同様に悩みぬいている。

●「三輪田のおみつさん」ゆかりのいっぴん

小宮ミツ[母]・ツチ[祖母]戸籍抄本 明治37(1904)年

三四郎が作中で感じた「三つの世界」のうち、旧弊に満ちた「立ち退き場」と見做した故郷を代表する人物として、母と祖母がモデルの「おみつさん」が登場する。

●「広田先生」ゆかりのいっぴん

夏目漱石肖像写真 明治43(1910)年

広田先生は「偉大なる暗闇」と与次郎が評した世界観を持つが、モデルの漱石も英国留学を経て、独自の文明観を培っていた。違うのは「坊主頭」であるかないかの外見か。

夏目漱石談「戦後文界の趨勢」 明治38(1905)年

日露戦争後の日本は「滅びる」とした広田先生に対し、モデルの漱石は「文壇が賑わうだろう」とした。ともに的中させているのは二人とも独自の社会・文明観を持ったゆえか。

●「与次郎」ゆかりのいっぴん

鈴木三重吉発与次郎モデル辞任届 明治 41(1908)年

鈴木がモデルの与次郎は、三四郎から借りた 20 円で馬券を買ったため「俺はそこまで墮落しない!」と憤慨した鈴木は、小宮宛にモデル辞任届を出し、木曜会での披露を乞うた。

●「野々宮宗八」ゆかりのいっぴん

寺田寅彦発小宮宛絵はがき 明治 42(1909)年

朝日新聞に『三四郎』が連載された翌年正月の小宮宛絵はがき。書簡中の人物名をすべて登場人物にしているため現実と創作世界が交錯するユニークなものとなっている。

寺田寅彦発小宮宛書簡 大正 14(1925)年

寺田は小宮の無二の友人として多くの書簡を残したが、本書簡は小宮宛の近況報告のなかで科学者（地球物理学）としての見解を披露した際のもの。

3. その他 — 展示をより深く理解するために —

●小宮豊隆資料について

展示の品々は、町出身でドイツ文学者・文芸評論家にして漱石研究の第一人者として知られた小宮豊隆（1884～1966）ゆかりの資料群です。

小宮豊隆は旧制豊津中（現育徳館中学・高校）を卒業後、東京帝大へ進学。この時漱石の知遇を得、最後には「漱石最愛の弟子」となります。漱石没後は門下の中心的存在として、漱石全集の編纂と共に、漱石旧宅や蔵書を中心とした遺品の保全に尽力し、その成果は東北大学漱石文庫や漱石山房記念館（東京）として実現しました。

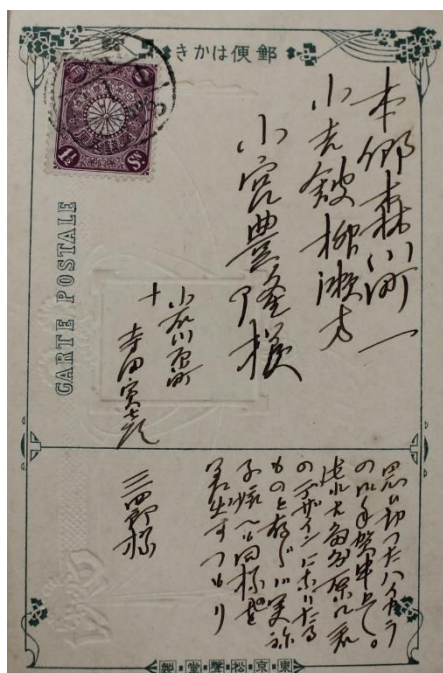
そんな小宮は、自身が漱石との交流の中で得た資料を宝物のようにして大事にしていたのですが、ご遺族の理解により平成 25（2013）年、その大部分を出身地となる当町の本館に寄贈頂きました。資料は今なお整理中ですが、書簡を中心に漱石は勿論、門弟やゆかりの人々との交流を物語るもの、漱石の作品に因むもの（特に小宮がモデルの『三四郎』ゆかりもの）等があり、わが国近代文学の成立を知る上で貴重な情報源といえます。

●漱石作品『三四郎』 明治 41（1908）年 9 月 1 日～同年 12 月 29 日 朝日新聞連載小説

漱石作品『それから』『門』とともに前期三部作とされるもので、主人公小川三四郎は小宮豊隆がモデルとされる。

あらすじ：熊本の高等学校を卒業して上京し、東京帝国大学に入学した三四郎の周りに、広田先生や野々宮さんに代表される学問の世界、故郷の母のいる世界、美禰子やよし子のいる世界の 3 つができる。作品は新学期の 9 月から年末までのおよそ 4 ヶ月を中心に、新しい都会の空気に触れて驚く三四郎の人々との交流や体験が、大学生活での体験を軸に描かれていく。美禰子にとらわれていく三四郎だが、美禰子は自分の肖像画を残し兄の友人のもとに嫁ぐ。

（あらすじは漱石山房記念館 [東京都新宿区] 図録から作品解説部分転載）



▲上：帝大入学時(明 38.9)の小宮豊隆と友人たち

小宮は立ち姿左側の人物 座る姿の右の人物が野上豊一郎

◀左：寺田寅彦発小宮宛絵はがき(明治 42[1909]年 1 月)